西欧人の前置語を伴う姓について

西　澤　秀　正

第1節　序　説

日本人の姓は、齋藤、藤原の如き単一形の姓のみであるが、西欧人の姓は、Andersen, Hemingway の如き単一形のほか、Ortega y Gasset, Noel-Baker の如き複合形の姓、いわゆる複合姓（注1）があり、さらにDe La Mareの如き前置語を伴う姓がある。複合姓は、原則としてその複合形の最初の部分から検索されたり、あるいは引用されたりするので、その取り扱いは、さほどの困難はない。しかし複合姓の中には、次に示すように接続詞またはハイフンを用いずに、複数の姓またはその他の語（実詞）を併列した複合姓がある。

Basil Henry Liddell Hart,1895－1970（イギリスの軍事研究家、第二次世界大戦史の著あり。）

David Lloyd George,1863－1945（イギリスの政治家、平和会議回顧録の著あり。）

かような形態の複合姓を同定することは、実際には容易ではない。「オックスフォード英語辞典」の「新補遺版」の“prefix”の項には（注2）、その語源に引用された例文の出典の中で、Charles Henry Douglas Toddの著書「The Popular Whippet（ロンドン, Popular Dogs, 1961年刊）」を“C. H. D. Todd:Popular Whippet.”の如く、複合姓（Douglas Todd）を単一形の姓（Todd）として引用されている。このことは、複合姓の同定が如何に容易でないかを示唆している。戦前東京帝国大学附属図書館編さん刊行の「東京帝国大学洋書目録」は、複合姓かどうか同定できない姓を単一形の姓として目録記入

が作成された場合には、複合姓としての形からも検索できるように、一律に参照が作成されている。このことも複合姓の同定が容易でないことを物語るものであろう。複合姓については、かようにその同定に容易でない場合があるにせよ、何れの国の事典、辞書、目録でも原則として複合姓の最初の部分から検索される。これに対して、前置語を伴う姓については、Walter De La Mare (1873−1956,イギリスの詩人、小説家) の如く、一見して前置語を伴う姓であることは確認できる。この点では、複合姓よりもその取り扱いは容易である。その反面、事典、辞書、目録類では、その前置語の部分の取り扱い方が国または言語によって異なり、従って検索される姓の部分の形に異同が生じている。この点では、複合姓よりも面倒な姓と言うべきであろう。すなわち前置語を伴う姓は、それぞれの国の慣習により、前置語から検索されたり、あるいは前置語に続く姓の基体部分から検索されたりする。このことを示す一例として、カナダの女流作家　Mazo De La Roche (1879−1961) を取り上げてみた。彼女は、カナダの田園地方に住む大地主一家をドラマチックに描きあげた作品によって、本国において大衆作家として人気をあげ、また国際的にも評価を得て、世界各国にその作品は翻訳されている。彼女の作品またはその翻訳書を欧米各国の全国書誌 (National Bibliography) などでは、彼女の名前がどのように取り扱われているかを比較してみた。彼女の名前、Mazo De La Rocheは、前置語を伴う姓を含む名前である。Mazo が名 (forename) で、De La Rocheが前置語を伴う姓である。この前置語は、フランス語の前置詞 (preposition) のdeと定冠詞 (definite article) のlaから成っている。この前置語に続く名前はRocheであるが、フランス語の女性名詞roche(岩)であり、女性形の定冠詞laを冠しているものである。

まず第1に、前置語すべてを姓の基体部分に前置する形をとるもの、すなわち——

De La Roche,Mazoの形をとるもの (ただし、前置語De Laの大文字法には、異同がある。)

イギリス (The British Library general catalogue of printed books.)

De La Roche (Mazo)

Mary Wakefield. London,Macmillan,1949.

アメリカ (The National Union Catalog,Pre-1956 imprints.Volume 137,p. 478)

De La Roche,Mazo,1885−

Mary Wakefield. Boston,Little,Brown, 1949.

イタリア (Catalogo cumulative del bolletino delle pubblicazioni Italiani. Volume 12,p. 319)

De La Roche,Mazo.

Finch's fortune. Verona,A. Mondadori, 1947.

スイス (Schweizer Bücherverzeichnis:Répertoire du livre suisse: Repertorio del libro Svizzero. 1971−1975, p. 428)

De la Roche, Mazo.

Mary Wakefield. Lausanne, Editions Recontre, 19__

スウェーデン (Svensk bokförteckning:The Swedish National Bibliography. 1974, p. 94)

De la Roche,Mazo.

Mary Wakefield. Sthlm. :Bonnier, 1974.

ノルウェー (Norsk bokfortegnelse:The Norwegian National Bibliography. 1976,p. 84)

De la Roche,Mazo (kan)

Mary Wakefield. 〔Oslo〕 : Cappelen, 1976.

デンマーク (Dansk bogfortegnelse:The Danish National Bibliography. 1955−1959,p. 126)

de la Roche,Mazo−

Mary Wakefield. Jespersen og Pio. 〔19〕56.

次に、前置語のうち、冠詞のみ姓の基体部分に前置し、前置詞は名前に後置する形をとるもの、すなわち——

La Roche,Mazo deの形をとるもの

フランス (Catalogue général des livres imprimés de la Bibliothèque nationale. Tome 89,Columm 84)

La Roche (Mazo de) —

Possession, by Mazo de La Roche. London, Macmillan, 1923.

ドイツ (Deutsche Bibliographie, Fünfjahres-Verzeichnis, 1961—1965. Bücher und Karten. p. 4036)

La Roche, Mazo de.

Mary Wakefield, Roman. 1965.

最後に、前置語すべてを名前に後置する形をとるもの、すなわち—

Roche, Mazo de laの形をとるもの

スペイン (Catalogo general de la Libreria Española. 1931—1950. Tomo 4, p. 84)

Roche (Mazo de la)

La fortuna de Finch. Madrid, 1945.

オランダ (Brinkman's catalogus van boeken en tijdschriften. 1961—1965. M—Z.)

Roche,Mazo de la.

Finch's fortuin. 's-Gravenh., Servire 〔1961〕

以上のとおり、カナダの女流作家Mazo De La Rocheの姓の取り扱いは、それぞれの国によって三通りに分かれ、西欧における前置語を伴う姓の取り扱いは、この3様式に大別される。

わが国の姓名には、印欧語族などに属する西欧の言語の人名と異なり、前置

詞とか冠詞とかの前置語を伴う姓という考え方は全くなく、これに対するわが国の慣習もない。併し、書誌情報の円滑な流通の促進と国内的、国際的な標準化を目的とする資料目録法では、以上のような名前の取り扱いについては、重要な課題となっている。

わが国における最新の標準目録規則である「日本目録規則　1987年版（略称：ＮＳＲ1987）」と米英加豪などの英語圏の標準目録規則「英米目録規則、第２版（Anglo－American Cataloguing Rules, 2nd edition. 略称：ＡＡＣＲ２）」では、前置語を伴う姓を如何ように取り扱っているかを比較検討してみた。

「ＮＣＲ1987」では、次のように規定している。

『西洋人名中の前置語の扱いはその著者の国語の慣習に従う。　注：前置語は、一般に名のあとにおかれる。アフリカーンズ語、英語、イタリア語、ルーマニア語（deを除く）においては、姓は前置語からはじまる。フランス語、ドイツ語、スペイン語においては、冠詞または冠詞と前置詞の縮約形だけが姓の前に置かれる。』と規定し、その取り扱い方の実例として、

『ド・ゴール，シャルル

フォン・ノイマン，ジョン

ラ・フォンテーヌ，ジャン・ド

デュ・ボス，シャルル

ヴァン・ヴォクト，アルフレッド』

以上の５例を挙げている。

次に、「ＡＡＣＲ２」では、前置語の取り扱いについて、次のように大別して規定されている。

第１類　わかち書きされた前置語を伴う姓（Surnames with separately written prefixes）

第１項　冠詞と前置詞（Articles and prepositions）

第２項　その他の前置語（Other prefixes）

第２類　姓とハイフンで結ばれた、または姓と膠着された前置語（Prefixes

hyphenated or combined with surnames)

以上のとおり「NCR1987」で取り扱う前置語の範囲は、その条文や実例の5例から判断すると、冠詞と前置詞だけであり、特にその実例からみると、この冠詞と前置詞はこれに続く姓の基体部分とわかち書きされているものに限られている。

従って、「NCR1987」は前記「AACR2」の第1類第1項に対応する規定である。さらに、「AACR2」の規則のたて方は、総則にも匹敵する条文の下で、各則ともいうべき著者の用いる言語の国ぐにごとに条文と実例を示して規定した詳細な規則となっている。これに対して、「NCR1987」は「AACR2」の前述の第1類第1項の規則を総括して規定した極めて濃縮された規則となっており、しかも実例もわずか5例である。

「NCR1987」と「AACR2」との間に、以上のとおり前置語の範囲や規定の仕方に異同が生じている。前置語を伴う姓の前置語を明確に同定するためには、前置語の性格、範囲を明確に理解している必要がある。そのためには是非とも前置語なる用語の意義と前置語を伴う姓の由来を検討することが必要であり、これが本稿の主題である。次節以降において、これについて論述したい。

第2節　前置語の意義

本稿でいう前置語なる用語は、前節で引用した「AACR2」の前置語を伴う姓の規則中で用いられている“prefix”に対する訳語であり、「NCR1987」でもこの訳語を用いている。前節でも述べたとおり、わが国の人名には印欧語族などに属する言語の人名と異なり、前置詞とか冠詞とかの前置語を伴う姓、あるいは父称形の前置語を冠する姓などの如きものは全くなく、従って前置語なる考え方もない。「日本国語大辞典」にもかような用語は掲載されていない。従ってわが国では誠に馴染みのない用語である。前述のとおり、前置語なる用語はprefixの訳語であり、この訳語の公的な使用は、定かではないが、恐らくは青年図書館員聯盟目録法制定委員会編「日本目録規則（NCR）昭和17年

刊」が最初ではないかと考える。

“prefix”なる語は、わが国では、印欧語属などに属する欧米語の文法学または言語史学において、“接頭辞”と訳され、呼称されているが、本稿で論じようとしている“前置語”には、もちろん接頭辞の意義も含まれているが、もっと広義のものである。「オックスフォード英語辞典」及びわが国の英和辞典により、“prefix”の語義を調べてみた。「オックスフォード英語辞典」には、次のように現れている。(注3)

第1義は、文法学でいう接頭辞の意味を記し、次に、第2義として、

“A title prefixed to a person's name, as Mr., Dr., Sir., Rev., Hon., Lord, etc.”と記している。

同英語辞典の「新補遺版」には、以上の第2義に付加する意義として、(注4)

“A word placed at the beginning of the registered name of a pedigree animal, esp. a dog, to indicate the establishment in which it was bred.”と記している。

オックスフォードの本版では、第1義の接頭辞のほか、第2義として人名の前に置かれるタイトル（title）すなわち、敬称、肩書き、名称等と記しているが、その新補遺版では、以上に示した人名の外に動物の名前、特に犬の登録名の前に置かれる語をも、prefixの第2義に加えると記している。すなわち「オックスフォード英語辞典」では、人名、動物名を問わず、名前の前に置かれる語を指しているようである。

次に、「研究社新英和大辞典」及び「小学館ランダム・ハウス英和辞典」の語義をみると、両者とも第1義として、“〔文法〕接頭辞”と記し、第2義として、前者は“氏名の前につける敬称《例えばSir., Mr., Dr.など》”と、後者は“前につけるもの、初めに置くもの（人名の前につける敬称など）”と、それぞれ記している。本稿で論述を試みようとしている前置語は、以上の第1義及び第2義ともに包含する広義の意味の用語である。

研究社の辞典に記されている“氏名の前につける敬称”の如き、敬称と限定

したものとは異なるものである。ランダム・ハウスの辞典に記されている“〔人名の〕前につけるもの、初めに置くもの”の記述は抽象的ではあるが、ここでいう前置語の意義に最も近似している。

第3節　前置語を伴う姓の由来

西欧人の前置語を伴う姓を明確に同定し、かつその前置語の範囲を確定するためには、西欧人の前置語を伴う姓の由来を検討する必要があり、このことは必然的に、さらに進んで西欧人の姓の起源出所を調べることとなる。姓を起源出所によって類別すると、大体次の4種類になると言われている。

第1群　父または祖先の名から由来するもの

第2群　居住の地名または居住の場所の地形的特徴から由来するもの

第3群　職業または官職から由来するもの

第4群　綽名、主として身体の属性、性格などから由来するもの

以上の区分は、大体定説となっている。学者によりさらに、細分して、以上の区分より多くの群に分けている場合もある。

イギリスの英語学者、フランス語学者Ernest Weekley（1865－1954）によると、姓の起源について（注5）

“姓は大別して四つの種類に分けられるが、多い順にあげると、場所、洗礼名、職務、綽名に、それぞれ起源をもつものとなる。”と述べている。Weekleyのいう“場所”は前述の姓の起源の第2群、“洗礼名”は第1群、“職務”は第3群、“綽名”は第4群に属するものである。

古代ローマ時代には、氏族（gens）または家族が真の本体であり、真の生活体であって、個人はその不可分の肢体に過ぎなかった。従ってローマ時代には、氏族名（Nomen）、家名（Cognomen）が発達し、最も重要なものと信じられた。これに反して個人名（Prenomen）は重要でなく、普通頭字1字あるいは2字で書かれていた。かの有名なローマの将軍、政治家、歴史家のシーザー（「シーザー」は英語式発音、ラテン語式には「カエサル」）の名前はGaius

Julius Caesar (100〜44BC) であり、Gaiusが個人名、Juliusが氏族名、Caesarが家名である。普通Julius Caesarといわれ、Caesarから検索され、また は記入される。

これに対して中世紀の社会では、中世紀後半に至るまで、真実の名は個人名または洗礼名で、家名はかなり後れて発達したものである。それ故個人名、主として洗礼名が基本の名となり、長い間唯一の名でもあった。従って中世紀の名前は、次に挙げる名前の如く、個人名から検索され、また記入されるわけである。Thomas Aquinas (1225−1274)

Thomas à Kempis (c1380−1471)

Laonardo da Vinci (1452−1519)

イタリアの神学者、哲学者トマス・アクィナスは、ナポリに近いロッカ・セッカ城でアクィノの領主の子として生まれた。ドイツの神秘思想家トマス・ア・ケンピスは、ライン河畔のケンペンで生まれた。イタリア・ルネサンスを代表とする画家、建築家、自然科学者レオナルド・ダ・ヴィンチはフィレンツェ近郊のヴィンチ村で生まれた。三者を日本式に呼称すれば、アクィノ伯家のトマス、ケンペンのトマス、ヴィンチ村のレオナルドというところであろう。

しかるに、中世紀の後半期に入ると、各地に家名、姓の発生をみるに至り、漸くこれが基本的な名前となった。従って、かような名前の保持者については、この家名、姓で検索され、あるいは記入されるわけである。

前例のAquinas, à Kempis,またはda Vinciは、個人名Thomas,Leonardoの添名 (byname) であり、各個人を同定する必要から生じたものであり、個人名と同様、その個人限りのものであり、世襲の家名、姓とは本質的に異なるものである。この添名は、初めは自称または他称による綽名的なものであって、ほんの一時的なものから発生したものである。この添名が、やがて子孫に継承される風習が起きてきて、ついに世襲の家名、姓となっていくのである。この過渡期の名前の保持者には、個人名もしくは添名または姓の両様の名前から、事典、辞書類に現れている場合があり、或は「…と称する」または「…と言われ

る」の意のdictus（ラテン語）、genannt（ドイツ語）、またはknown as（英語）なる語が挿入されて表示されている場合もある。例えば前掲のLeonardo da Vinciは、ほとんどの事典などは、個人名または添名から現れているが、事典により、特に欧州大陸系のものは、次の如く表示されているものがある。

Leonardo, *genannt* da Vinci（注6）

Vinci（*dit* Léonard de）（注7）

またカンタベリ大寺院の大司教トマス・ア・ベケット（1118？－1170）は、

Thomas, *known as* Thomas à Becket（注8）

と記されている。

世襲の家名、姓の発生は、中世の封建制度の確立と密接な関係がある。封建制度社会の特色は数多の階層から成立していると同時に、すべてが世襲制度によっておおわれていた。領主は土地をあだかも私有財産の如く子孫に相伝した。この世襲制度は職業などにも及び、特権階級は世襲している土地や官職または職業の名前によって呼ばれ、この名前がやがて世襲されて家名となった。一般の庶民階級も、人口が増加し、さらに交通も頻繁となり、それぞれの個人を同定するためには、前述の何らかの添名が必要となり、これが世襲されて家名となった。

前述のWeekleyによると（注9）、イギリスの中世紀の古記録には、4種類の名前が見られると述べて、次の例を挙げている。

(1) John *filius Simon*

(2) William *de la Moor*

(3) Richard *le Spicer*

(4) Robert *le Long*

以上の4種類の名前は、世襲の家名、姓が確立以前の庶民階級の添名を伴った個人名である。これらの名前を種種の視点から検討してみたい。まず第1に、それぞれの個人名の添名を類別してみると、

(1) John filius Simonの添名filius Simonは父の名から名付けられたもの

(2) William de la Moorの添名de la Moorは居住の場所の地形的特徴から名付けられたもの

(3) Richard le Spicerの添名le Spicerは職業から名付けられたもの

(4) Robert le Longの添名le Longは身体的特徴から名付けられたもの

以上の4種類に類別され、当然ながら前述のWeekleyの姓の分類における“洗礼名、 場所、職務、綽名”に対応しているものである。

個人名についてみると、

Weekleyの挙げているJohn、William、Richard、RobertのほかにHenryを加えた五つの個人名は、中世紀末におけるイギリスの名前の過半数を占めていたが、このことは、前述の事情に加えて、中世社会の基本的名前である個人名、主として洗礼名のほかに、添名なる形態の名前の発生の必然性があったわけである。

Weekley の4種類の名前を概観してみると、

フランス語、いわゆるアングロ・フレンチの影響、すなわち中英語の特徴を次のとおり色濃く示している。

㋑ (1)のJohn filius SimonのJohn及びSimonはキリスト十二使徒のヨハネ、シモンから由来するキリスト教の洗礼名であり、(2)のWilliam、(3)のRichard及び(4)のRobertは何れも、ノルマン人の個人名から借入されたものである。このように、ノルマン人の名前が急速に従来の英語の名にとって代わると同時に、また同じ個人名を繰り返し用いるノルマン人の命名法も導入された。この命名法の慣習は、個人名の選名源を限りなく減少させ、人口の増加と相まって、添名の使用を加速させた。

㋺ (1)の添名のfilius Simonのfiliusはラテン語で、英語のsonの意であり、現代のフランス語ではfilsである。古フランス語ではfizであり、アングロ・フレンチではfitz として借入された。従って(1)の名前は、「Simonの子John」の意であり、父祖名に由来する名前で、第4節で後述するいわゆる父称（patronymics）に由来するものである。

filius Simonなる父称形は、やがてFitz Simon, FitzSimonまたはFitzsimon となり、父祖の個人名に膠着されて、1語として表示されるようになった。現在次に示すような英米人の父称に由来する姓の1種類として存在している。

Edward FitzGerald (1809－1883)

英国の詩人、彼の最高傑作“The Rubaiyat of Omar Khayyam”の著あり。

F. Scott Fitzgerald (1896－1940)

米国の小説家

㈧ (1)の父称形の添名及び(2)、(3)、(4)の広義の綽名的添名は、固有名詞である個人名の後に置かれ、さらに個人名に付加される修飾語的な名称には、フランス語のle、laの定冠詞を伴い、また場所をあらわす添名には、フランス語の前置詞deを伴っていることが大きな特徴となっている。

㈨ (2)の添名de la Moorは、場所に由来する添名であるが、この添名は次の如く2種に分けられる。

1. 村、町などの地名に由来するもの

2. 丘、岡、森などの地形的特徴に由来するもの

前者に属するものは、貴族の場合にはこの地名はフランス語の前置詞deを冠して領地を示したものがある。この名前を世襲姓としている末裔がその姓によって名門の出であることを誇示し、または時には僭称している場合も生じている。この前置語deは次に続く名前にアポストロフを用いて結合されたり、または完全に膠着されている場合が多い。

後者に属するものは、Hill,Woodなどに居住していたとか、あるいは、その近くに居住していたとかによるものである。MoorまたはMooreもこの部類であり、(2)de la Moorは、この部類の添名である。従って、(2)の名前は、「ヒースなどの各種の小低木の生い茂った荒野に住むまたはその近傍に住むWilliam」の意であり、エミリ・ブロンテ作「嵐が丘」の小説

に出てくるイングランド北部に見られる荒涼たる原野の情景をうかがわせるものである。

㋭ (3)の添名le Spicerは、職業に由来するもので、「香料商」の意であり、従って(3)は「香料商のRichard」の意である。このSpicerのspiceは中英語期におけるフランス語からの借入語である。かように中英語にはspiceのほかに食物に関する語cinnamon、mustard、vinegarの如き、フランス語からの借入語が多く見られる。

㋬ (4)の添名le Longは「ノッポ」の意である。Longはフランス語からの借入語であり、「ノッポのRobert」の意である。

第4節　姓の分類と前置語を伴う姓

前置語を伴う姓を明確に同定するためには、その前置語の性格、範囲を的確に把握する必要がある。その手始めに、第2節において、前置語のもつ意義を検討した。続いて第3節において、前置語を伴う姓の性格、範囲を明確にする手立てとして、前置語を伴う姓の淵源を探る必要があり、そのために西欧人の姓の歴史を辿り、さらに進んで世襲姓の源となった中世紀の個人名の添名の検討を行った。Weekleyが中世の古記録から取り上げた4種類の名前を例証に用いてその性格、種類を述べ、さらにこの4種類の名前に対する個人名の添名が子孫に継承されるようになって、近代姓の発生をみるに至った経過を前節において述べたわけである。前節で述べたとおり、この添名の中に、既に現代の前置語を伴う姓の前置語の姿をみることができる。すなわちde la Moorのde la、le Spicerのle、le Longのleが示すとおり、近代姓に伴う前置語に相当するものが発生している。

もちろん本稿で例証に取り上げたWeekleyの名前は、すべて中世紀のイギリス人の名前であり、アングロ・フレンチの影響を強く受けていたものであることは、前述のとおりであるが、13世紀初頭に英語が復権し、イギリス人のフランス語能力の低下と復権後の英語の影響を受けて、アングロ・フレンチ由来の

前置語は脱落し、Moor、Spicer、Longの如き姓へと発展した。また一方では、Weekleyの名前には、挙げられていないが、例えばde la Moorに類する居住の場所の地形的特徴を示す添名は、英語の復権後、at the（但し、theのthはthorn文字を使用）の同化によるatteをアングロ・フレンチ由来の前置語にとって代わり、さらに、このatteは名前の基体部分に膠着されて近代姓となったものもある。全英的に最も権威のある「大英伝記大辞典（The dictionary of national biography)」には、以上のことを示す好個の事例の名前が、次例の如く掲載されている。(注10)

例1　Atwell, Hugh（d. 1621）

Hugh Atwellの姓Atwellは、AttawelまたはAttewellとも記されている。恐らくはAtteなる前置語を伴う添名または姓のAtte Wellが、一語に膠着されてAttewellとなり、続いてAttawelと変化し、ついにAtwellと変化したものと考えられる。この姓の父祖は、泉、源池または井の頭に居住またはその近傍に居住していたことをうかがわせるもので、前述の姓の分類の第2群に属するものである。

例2　Attwood,Thomas（1765－1838）

Atwater,William（1440－1521）

例1の姓と同類のものである。これについて、Weekleyは次の如く、(注11)

「居住場所に由来する姓には、前置詞が含まれていることが多い。例えば、Atwood（アトウッド、at wood“森で”）、Underhill（アンダヒル、under hill“丘の麓で”）などである。また時には、冠詞が含まれていることもある。例えば、Atterbury（アタベリ、at the bury（＝burg）“町で”…」

と、述べている。

Weekleyの挙げるAtwoodはat woodから由来するものと、一

概に断定できない。例1にも見られるが如く、at theの同化によるatte woodから由来したものかもしれない。Atterburyは明らかに例1と同類のものである。

これに対して、欧州大陸におけるロマンス諸語、ゲルマン諸語などの名前では、前置詞、冠詞を伴う添名または姓の習慣は、そのまま存続し、例えば、「NCR1987」の実例に挙げられているJean de La Fontaine、Charles Du Bosの如き、近代姓の中に多数見られる。現在英米人の姓にも多数の前置語を伴う姓が見られるが、父称を示す前置語である接頭辞のものを除き、例えば「NCR1987」の実例に挙げられているJohn Von Neumann、Alfred Elton Van Vogtの如き前置語を伴う姓の保持者は、父祖または本人が英米に帰化した者と考えられる。

次に、前置語を伴う姓の前置語の性格、範囲を結論づけるために、「AACR2」または「NCR1987」で取り扱う前置語と第3節で述べた姓の起源出所による分類との関係について述べることにする。

「AACR2」の前述の第1類第1項（冠詞と前置詞）にいう前置語を伴う姓とは、第3節で述べた姓の分類の第2群、第3群及び第4群に属する姓で、かつ前置語を保有している姓と解釈すべきである。次に、「AACR2」第1類第2項（その他の前置語）にいう前置語を伴う姓とは、姓の分類の第1群に属する姓で、かつ前置語をもって父称を示した姓と定義付けるべきである。併し「AACR2」では、実際には、父称以外の前置語も含めている。このことについては後述する。また「AACR2」第1類第1項の前置語は前置詞と冠詞または前置詞と冠詞の縮約形であるが、この前置詞と冠詞は、姓の基体部分に膠着される傾向があることが、その特徴である。このようにして膠着されたものは、「AACR2」の第2類に規定されている。例えば、第1節（序説）で述べたMazo De La Rocheの前置語を伴う姓De La Rocheは、フランスの画家、Paul Delaroche（1797－1856）の姓では、前置詞と冠詞が姓の基体部分に膠着されて、1語になっている。

「ＮＣＲ1987」にいう前置語を伴う姓は、第１節（序説）で述べたとおり、「ＡＡＣＲ２」第１類第１項（冠詞と前置詞）に相当するもののみを規定し、次のとおり、

(1) ド・ゴール，シャルル

(2) フォン・ノイマン，ジョン

(3) ラ・フォンテーヌ，ジャン　ド

(4) デュ・ボス，シャルル

(5) ヴァン・ヴォクト，アルフレッド　エルトン

以上の５例の実例を挙げている。

(1) ド・ゴール，シャルル

原綴：Charles de Gaulle（1890－1970）

フランス第５共和国初代大統領、ド・ゴールの名前は「ＮＣＲ1987」の実例では、前置語deを姓の基体部分に前置する形で示しているが、条文では名前に後置するように規定している。これについては後述する。

(2) フォン・ノイマン，ジョン

原綴：John Von Neumann（1903－1957）

ハンガリー生まれ、1937年米国に帰化、第一世代コンピュータ時代にプログラム内蔵方式を提唱したことで著名。

(3) ラ・フォンテーヌ，ジャン　ド

原綴：Jean de La Fontaine（1621－1695）

フランスの詩人、前置語de Laに続く名前Fontaineはフランス語の女性名詞fontaine（泉）であり、女性形の定冠詞laを冠している。この前置語を伴う姓は第３節で述べたWeekleyの添名を伴った中世記の名前William de la Moorと同様、父祖の居住の場所の地形的特徴から由来した姓であることは、一見して察せられる。

(4) デュ・ボス，シャルル

原綴：Charles Du Bos（1882－1939）

フランスの批評家、前置語Duはフランス語の前置詞dèと定冠詞leの縮約形。

(5) ヴァン・ヴォクト，アルフレッド　エルトン

原綴：Alfred Elton Van Vogt（1912－　）

オランダ系米国人

以上「ＮＣＲ1987」の５例の実例に示されているが如く、前置語を伴う姓の前置語の取り扱いについて、英仏人の慣習は異なっている。英米人の慣習は、英米国籍者または英米永住者の名前が英語の姓であると否とにかかわらず、英語の前置語（父称形の接頭辞及び前置詞、冠詞であるが、そのほとんどは実際には姓の基体部分に膠着されている。）及び英語以外の前置語（前置詞、冠詞）のすべてを姓の基体部分に前置する。

「ＮＣＲ1987」の実例では、

Von Neumann,John

Van Vogt,Alfred Elton

これに対して、フランス人の慣習は、フランス語の姓の場合、冠詞及び前置詞と冠詞の縮約形は姓の基体部分に前置し、前置詞のみ後置する。

「ＮＣＲ1987」の実例では、

La Fontaine,Jean de

Du Bos,Charles

ド・ゴールの名前は、前述のとおり「ＮＣＲ1987」の実例では、前置詞deを姓の基体部分に前置する形で示している。フランスの「ラルース大百科事典」、「フランス国立図書館（ビブリオテーク・ナショナール）蔵書目録」、「大英図書館蔵書目録」、「英国全図書誌」、アメリカの「ナショナル・ユニオン・カタログ」などでは、“Gaulle,Charles de”を主見出しにしている。これに対して、わが国の事典、辞書、新聞など及び邦文の書名などでは、次に示すとおり、すべて“ドゴール”または“ド・ゴール”の形で示されている。

例１（新聞の見出し）

朝日新聞（昭和33年12月22日）の第1面の記事見出し

「ドゴール首相大統領当選」

例2（書名）

「ド・ゴール大戦回顧録　全6巻　村上光彦、山崎庸一郎共訳　　みすず書房刊」

ド・ゴールは、第二次大戦中フランスがドイツ軍に降伏後、イギリスに亡命し、ロンドンよりフランス国民に向けて抗戦継続をBBC放送を通じて訴え、ド・ゴールの名で世界に知らしめた。わが国は戦後ド・ゴールの名前は英米を通じてもたらされたため、ド・ゴールの如く、英米の慣習による名前の形が定着し、ゴールでは通用しないのが現実である。人名は、当然のことながら、人名保持者の母国における形で用いるのが原則であるべきであるが、ド・ゴールの如く、原則どおりでは、処理できないことを示す一例である。

「ＡＡＣＲ２」の第1類第2項（その他の前置語）には、その実例として、次に示す英語、ゲール語、ウェールズ語系の接頭辞を冠する姓を保有するイギリス人の名前4例をあげている。

(1) Ap Rhys Price, Henry Edward

(2) Ó Faoláin, Seán

(3) FitzGerald, David

(4) MacDonald, William

以上は、父称を示す接頭辞（Ap, Ó, Fitz, Mac）を冠する姓を保有するイギリス人の名前である。

印欧語族では、父称を用いて自己の名前を他と区別する方法を早くから採用していた。これが子孫に継承されて、世襲の姓が形成され、近代姓が確立されるわけである。これの表現形式は、父の個人名に接頭辞または接尾辞 - son、-sen、-sohnなどを接辞するのが最も顕著な特徴である。各民族はそれぞれ独特の接頭辞または接尾辞をもって表現した。もちろん、この接頭辞または接尾辞が省略されて、父祖の個人名そのままの場合もあり、また父祖名の属格形に

よる曲用の場合もある。

(1) Ap Rhys Price, Henry Edwardについて

Ap Rhys Priceを姓とする名前である。この姓は、恐らくは母方の姓であるAp Rhysと父方の姓であるPriceとを併列した複合姓であるかもしれない。Ap Rhysは接頭辞Apを冠する姓である。Apはウェールズ人の個人名に前置してson ofの意を示す。ウェールズ語のMapは、スコットランド人及びアイルランド人の言語ゲール語のMacと同族語であるが、このMapの頭字のMが遺脱してApまたはAbとなったものである。この接頭辞ApまたはAbを冠する父称形の添名の発生を示す1例を次に示す。

「大英伝記大辞典」により、次のウェールズ人の名前を検索すると、

"Rhys ap Tewdwr (d.1093) ,Welsh king,was the son of Tewdwr ap Cadell ab Einon ab Owain ap Hywel Dda…" (注12)

と記されている。すなわち、「Rhys ap Tewdwr は1093年死、ウェールズ王で、Hywel Ddaの子のOwainの子のEinonの子のCadellの子のTewdwrの子である…」と記されている。ApとabはSon ofの意であり、続く語の頭字が子音か母音かによって、apとabを使いわけていることがよくわかる。

なおウェールズ語のRhysは英語のRiceと同族語であることを示す例が「大英伝記大辞典」に現れている。(注13)

すなわち、Rhys ap Thomas (1449−1525) は、またRice ap Thomasとも記されており、ウェールズ語の Rhys は英語のRiceと同族語であることが察せられる。

前述のとおり、Ap Rhys PriceはAp Rhys とPriceから成る複合姓と思われるが、このPriceはウェールズ人の名前ap Riceの省約形、またBevanはAb Evanの省約形であり、PまたはBで始まるウェールズ人の姓の大部分はこのようにして形成されている。従って Henry Edward Ap Rhys Priceの姓は典型的なウェールズ人の姓であり、ファースト・ネームとミ

ドル・ネームはイギリス人の普通の洗礼名であるが、この名前の保持者の父祖はウェールズ人であることがわかる。また複合姓Ap Rhys PriceのAp Rhysはウェールズ語の名前の純正さを保っているが、Priceは英語化された名前となってる。

(2) Ó Faoláin, Seánについて

アイルランド系のゲール語の名前であり、アイルランド人の姓の大部分は、Ó Faoláinの如き接頭辞を冠するものである。この接頭辞Óは父祖の個人名に冠してgrandson ofの意を示す。O' Brien, O' Connellの如き姓は、アイルランド系のゲール語の姓の英語化されたものと考える。例えばO' Brienはゲール語の名前Ó Briainを英語化すると同時に、父称を示す接頭辞Óをアポストロフを用いて結合したものと考えられる。従って、Seán Ó Faoláinは英語化されていない純性なアイルランド系のゲール語の名前である。

(3) FitzGerald, Davidについて

全節において個人名に対する添名の類別の中で挙げたEdward FitzGeraldやFrancis Scott FitzGeraldと同類のものである。この接頭辞Fitzはノルマン人によってイングランドにもたらされたもので、ノルマン・フレンチ系のイングランド人によって使用され、12世紀頃から使用されている。個人名に冠して通例国王または王侯の庶子であることを示す。Fitzclarenceはクラレンス侯の庶子の意である。

(4) Mac Donald, Williamについて

スコットランド人またはアイルランド人の個人名に冠して、grandson ofまたはson ofの意を示す。個人名の初字が大文字、小文字の両様などがある。例えば、MacDonald, Macdonald, McDonald, McDonald, M'Donaldなど、稀にはMac-Donald,あるいは全くはなしてMac Donaldの如き形がある。日本が昭和20年9月2日東京湾の米戦鑑ミズリー号上で調印した終戦文書には、Douglas MacArthurはDouglas Mac Arthurと

署名している。

「AACR2」の第1類第2項（その他の前置語）には、以上のイギリス人の父称を示す接頭辞である前置語のほかに、セム語族のアラビア人名に用いられる‘Abd,Abu,Al及びヘブライ人名に用いられるBenの例が挙げられている。これらを印欧語族の人名の前置語を伴う姓と共に、一律に律することは極めて不合理である。東洋系の人名についても同様であるが、セム語族の人名は別項で規定すべきである。これらの名前についての論考は別稿にゆずりたい。(注14)

さらに、「AACR2」の「その他の前置語」の中には、A'Beckett,Gilbert Abbottの名前が挙げられている。すなわち、Ap,Ó,Fitz-,Mac-の父称を示す接頭辞と共に、フランス語の前置詞âから由来するA'を同一に取り扱っている。このA'は第3節で述べた姓の分類の第2群に所属するもので、前置詞と冠詞を伴う姓の中において規定されるべき性格のものである。ただアポストロフが使用されているのは、この姓の形成過程において、もともとはこの前置詞âは分離されていて、前節で挙げたThomas à Kempisと同様、à Beckettと記されていたが、結合される際にアポストロフを用いて一語とされたものである。かような結合のしかたは、前述のアイルランド人の父称形式にみられるO'BrienやO'Connellと同一形式のものである。また、A'Beckett,Gilbert Abbottの名前は、「大英伝記辞典」では、À Beckett,Gilbert Abbott（1811－1856）の形で現れており、カンタベリ大寺院の大司教Thomas à Beckett（1118？－1170）の直系の家系であることが記されている。(注15)

結　語

以上のとおり、Weekleyの中世紀の古記録から取り上げられた名前、「AACR2」の父称を示す接頭辞を冠する姓、「NCR1987」の前置詞及び冠詞を前置語とする姓などの実例を用いて、西欧人の前置語を伴う姓を歴史的に論述を試み、その性格、範囲などを概ね明らかにしたつもりである。しかし、取り上げた例証が英語を源流とするものに偏り過ぎていることは否めないが、今回

はこれで稿を終える。

注1　欧米人名の命名法について　西澤秀正著　（信州豊南女子短期大学紀要第3号　昭和61年　p. 78－81）

注2　The Oxford English dictionary. Supplement. Edited by R. W. Burchfield. Oxford,Clarendon Press,1982. Vol. 3 ,p. 750.

注3　The Oxford English dictionary. Oxford,Clarendon Press, 1933. Vol.8,p.1270.

注4　〔前掲　注2〕 Vol. 3,p. 750.

注5　ことばのロマンス　英語の語源　ウィークリー著　寺沢芳雄、出淵博訳　岩波書店　1987　（岩波文庫）　p. 348.

注6　Meyers Grosses Konversations Lexicon.

注7　Larousse du XXe Siécle.

注8　The dictionary of national biography. Oxford,Oxford University Press,1917－　Vol. 19,p. 645.

注9　The romances of names,by Ernest Weekley. 2nd ed., revised. London, John Murray,1914. p. 2.

注10　〔前掲　注8〕 Vol. 1 ,p. 712－714.

注11　〔前掲　注5〕 p. 353

注12　〔前掲　注8〕 Vol. 16,p. 974.

注13　〔前掲　注8〕 Vol. 16,p. 977－978.

注14　回教国人名の目録記入について　西澤秀正著　（図書館学会年報　Vol. 4 ,no. 3. Dec.1957. p. 22－32）

注15　〔前掲　注8〕 Vol. 1,p. 31.